

## アクティブラーニング型授業「舞姫」の場合

——まとめ学習における認知プロセスの外化と内化（上）——

小川 満江

### ◇ はじめに

「舞姫」（森鷗外）を教材とした授業実践について、これまで「アクティブラーニング型授業『舞姫』の場合―発表資料に見られる認知プロセスの外化と内化―」「アクティブラーニング型授業『舞姫』の場合―授業中の発表及び交流学习における認知プロセスの外化と内化―」としてまとめてきた。本稿では平成23年度から平成30年度にかけて、まとめ学習として実践してきたことを報告したい。

各年度実施したまとめ学習において共通している方法を次に述べる。どの年度も、発表学習終了後、各自が全体を通して考えたことを文章にまとめさせた。書かせる前に、生徒が発表資料の「全体を通して―感想・考えてみたいこと」の欄に記していた内容や話し合いの中で話題になった内容を、まず授業者が整理して提示した。各年度の授業展開に応じてテーマを整理しているので、提示した内容は年度によって違っている。

用紙は、800字の原稿用紙（生徒は600字～800字程度で

まとめている）、あるいは授業者が作成したA4版のシートを使用した。

生徒が各自テーマを決めて文章にまとめた後は、授業者が全員の文章を打ち直し、プリントにして読ませている。生徒が書いたものに対しては、コメントを書き返却した。

本稿で、各年度のまとめ学習における認知プロセス外化の実態を整理・分析し、別稿で、認知プロセス内化を中心に分析しようと考えている。内化活動として、意見文に対する感想を25年度・29年度は手紙形式で、27年度は「学んだこと」として書かせている。その3年度については生徒個別の分析は外化も含めて別稿で行い、本稿では外化の全体的な傾向をまとめることにする。

認知プロセス外化の実態は、生徒が書いた意見文、「その後の物語」にみられるものである。年度ごとに「まとめ学習の方法」「意見文の内容・『その後の物語』の内容」「分析」として整理した。

なお、「まとめ学習の方法」については、共通する点は前述したのと、年度によって違う点を記している。

## 1 平成23(2011)年度の場合(生徒数23名)

### (1) まとめ学習の方法

「豊太郎とエリスの物語」(豊太郎その後・エリスその後)、「森鷗外がこの作品で伝えたかったこと」についてグループで話し合わせ、話し合った内容を学習シートに整理させた。

また「豊太郎の人物像を考える」(肯定的に捉えるか・否定的に捉えるか)については各自が文章にまとめ、「なぜ、最後に、豊太郎はエリスを選ばなかったのか・豊太郎は、なぜエリスを残して日本に帰るといふ決断をしたのか」「相沢と会ったのがよかったのか、相沢と会わなければどんな人生になっていたか」「周囲がもう少し温かい対応をしていたら違ったのではないか」「エリスの母は豊太郎に対してどう思っていたのか」という問いについては各自学習シートにまとめさせた。「豊太郎の人物像を考える」については各自が書いたものをグループで読み合い、まとめた上で、全体に報告している。なお生徒が書いたものは、授業者が整理してプリントにし、単元の終わりに配布して読ませた。

### (2) 意見文の内容

豊太郎の人物像について肯定的に捉えた者が8名であった。

豊太郎の弱さ、優柔不断さ、ふがいなさ、優しさ、矛盾、葛藤等に人間らしさを感じていたものが多い。その弱さは人間誰もが持っているものだとする。また、近代化が進んでいたとは言え、国や家を中心で個人の自由や自我はまだ尊重されず、学問や職、地位、名誉が優先されていた明治という時代においては、豊太郎の決断、行動をやむを得ないと考えている。

否定的に捉えている者は15名である。

否定されるのは、豊太郎の、決断力のなさ・選択からの逃避・自分の考えをしつかり持とうとしないこと・周囲に流されやすいこと・無責任さ・弱さ・自己中心性等である。これらの点は肯定的な見方においても押さえられていた豊太郎の特性であるが、その特性を、豊太郎自身が見つめ、克服すべきであると考えている。

特にエリスの気持ちを考えず、エリスを傷つけ人生を狂わせたことについては非難している。

### (3) 「その後の物語」の内容

5グループで話し合っている。

豊太郎のその後については、4グループが帰国後の仕事は順調で、名誉を回復し、出世したとする。そのうち3グループが上司の紹介で相沢の相手と結婚し、子どもにも恵まれ幸福な家庭を築くとしていた。4グループとも豊太郎は表面的にはエリスのことに触れないが、エリスへの罪悪感に残り続けると考えている。2グループは第一線の仕事から退いて、自らの人生を振り返った時、懐疑的になっている豊太郎像を考えていた。1グループが帰国後天方伯の気が変わり再び職を失った豊太郎を設定していた。年を経て再びエリスのもとへ行くがエリスは結婚して幸せな生活を送っており、豊太郎は悲しみのうちに帰国するという展開である。

エリスのその後については、どのグループもエリスは子どもを無事出産したとしている。その後の内容はグループによって違い、(再婚して幸せになった／豊太郎に日本に会いに行くが会えないまま帰国する／豊太郎についての記憶は失い、子どもと母親と共に幸せな

生活を送っている／子どもが豊太郎に似ているためにやりきれなくなり死を選ぶ／エリスの病は癒えず、他人に預けられた子どもは豊太郎のことを聞き許せないと思っている」のように展開している。

#### (4) 分析

豊太郎を肯定的に捉えた理由としては、弱さや矛盾に人間らしさを見ていること、国家や家を中心であった明治という時代性を考えると豊太郎の決断行動はやむを得ないとする。ことの二点にまとめられる。否定しているのは特に豊太郎の無責任さや自己中心性がエリスという他者を傷つけたということである。

「その後の物語」作りは、メンバーそれぞれが意見を出し合っていたグループが多かったが、リーダーシップのとれる生徒がいるとその生徒に任せるといったグループもあった。他のグループの発表を生徒は興味を持って聞いていた。

その後の豊太郎の人生は表面的には順調であるが、罪意識や懷疑は残り続けるという物語が多い。エリスの人生は幸福や不幸さまざまに考えている。

### 2 平成24(2012)年度の場合(生徒数17名)

#### (1) まとめ学習の方法

本年度は「舞姫」その後の物語を17名全員に書かせた。「豊太郎やエリスがその後どうなったか考えてみたい」という感想が多く出され、一人ひとりがある後の物語を書くことに抵抗がない様子だったからである。23年度のように「豊太郎その後」「エリスその後」として分けていない。豊太郎を中心に書いているもの、エリス

を中心に書いているもの、両者について書いているものとさまざまであるが、豊太郎を中心に書いているものが多い。「豊太郎の人物像」についてはまず各自が文章にまとめ、それをもとにグループで話し合い、その内容を全体に報告し、質疑を行っている。本年度については「舞姫」その後の物語」についてのみ整理した。

#### (2) 「その後の物語」の内容

「豊太郎のその後」について書いていた内容を次のように整理した。帰国後豊太郎は天方伯のもとで順調に働き、出世するとしたものが9名である。そのうち出世した豊太郎の罪意識について述べている者が5名であり、内容は次のようなものである。(「いったん薄れていたエリスへの思いはエリスからの手紙によりよみがえり罪悪感にさいなまれる」)(資料1a) (「罪をつぐなうかのように出世に貪欲になり再び機械的人間になる」)(資料1b) (「15年後ドイツに行き、豊太郎のことだけが記憶から抜けているエリスと娘に再会する。申し訳なく思いつつもその場を去る」)(20年後ドイツを訪れ、法学者になった息子に会う。息子は豊太郎が父であることは知らない。エリスの墓に参り20年前下した自分の決断を後悔する」)(エリスへの罪悪感から結婚もせず一人で生活する)

9名のうち4名は次のような展開にしていた。(「18年後ベルリンを訪れた時偶然息子に会い、真実を知った息子から復讐される」)(「1年後ベルリンに行き幸せをつかんだエリスに出会い、ベルリンへの思いから訣別する」)(資料1c) (「仕事が忙しくなるにつれエリスのことを思い出すこともなくなり、相沢への小さな憎しみだけが残る」)

(「2、3年はドイツの記事を見るたびに心が痛むが、18年後天方伯の

急逝により国内での重要な仕事が予測され、ベルリンから訣別する。

6名は、出世に触れていない。次のような内容である。(豊太郎の弱くふびんなる心はそのまま、帰国しても出世の機会は得ず、相変わらず葛藤している)〈弱き心を認識した豊太郎であるが、いつまでも相沢に操られている〉(エリスの死、子どもの死を告げるベルリンからの手紙を受け取った豊太郎には生涯消えることのない罪意識が残る)〔資料1d〕(エリスの母親からの手紙でエリスの病が癒えないこと、豊太郎に似ている子どもを無事出産したことを知り、豊太郎は自身のあり方を懐疑する)〈エリスへの罪悪感から結婚もせず、一人で生活をする〉(エリスと子の墓参りをした豊太郎が、エリスの残した日記を読み、相沢を憎む心を消せないでいる)

エリスの物語を中心に書いていた者は3名である。エリスの状態や心情を次のように描いている。〈病は癒えず、狂乱状態で死んでしまいが、最後まで豊太郎との幸せな生活を夢見ている〉(子どもを産み、豊太郎への思いとは訣別し、子供とともに強く生きていこうと決意している)〈子どもを出産し、豊太郎への憎しみは消え、強い母性愛を持って生き直そうと決意している〉〔資料1e〕

エリス、豊太郎の物語を半々に書いていた者が、3名であった。(エリスは流産し、憔悴して豊太郎を待ち続けている)〈エリスは病も回復し、援助を受けながら子どもを育てている〉(豊太郎の物語と子どもの物語をオーバーラップさせ、父が日本人であると気づいた子どもが父のことを知りたいと願うようになり、日本で働くことになった)

### (3) 分析

出世して仕事に励む豊太郎像を描いているものが多い。また小説の末尾の表現「一点の彼を憎むころ今日までも残りけり」は帰東の船中での豊太郎の述懐であるが、そこから読み取れる罪意識は生涯残り続けるとしていたものが多かった。罪意識、ベルリンからの訣別のきっかけとしてエリスの幸福や時の流れを想定していたものもあった。エリスの人生については、幸福な結末や不幸な結末を考えていたが、いずれにしても小説からも読み取れたエリスの母性に触れていた。

### 3 平成25(2013)年度の場合〔生徒数17名〕

#### (1) まとめ学習の方法

ワークシートに、「豊太郎の人物像」は全員に「エリスに関すること・相沢に関すること」については選択したものを、文章にまとめさせた。豊太郎の人物像については肯定的に捉えるか、否定的に捉えるかの立場を明らかにさせ、次に「なぜなら」という書き出しで自分の捉え方の根拠を述べさせている。全員の意見文をそれぞれが読んだ後、二名の文章に対する感想を手紙の形で書かせた。

#### (2) 意見文の内容

##### ア 豊太郎の人物像について

肯定派は6名であった。肯定派の考えを次の四点に整理した。

○帰国という最終的な選択について、「生きる」か「愛を取ったがゆえに身を滅ぼしてしまう」かどちらかの選択であり、豊太郎自身の人生を生きたため、日本へ帰るといふ選択を取らざるを得なかった

こととして考えている。

○豊太郎の葛藤・自己矛盾による苦しみ・孤独や不安・優柔不断や無責任や薄情である態度・弱さを「人間味溢れる」「人間の誰もが持っている」「理想の姿ではなく私たちの現実を映している姿」と捉えている。

○相沢を憎む心についても「人間誰しもが抱く感情」と捉えたり、「本当は裏返して、自分の責任を深く自覚しているが故にその重さに耐えられず逃げ出したかったのか」という見解を述べている。

○豊太郎の「友を思う」優しさ、「愛する人を傷つけまいとする」優しさに触れている。

否定派は11名であった。次に生徒が豊太郎のどのような点を否定していたか整理する。まず豊太郎の行動や特性の次のような点を否定していた。「薄情さ・身勝手さ・自分本位・自己中心的・言い訳がましさ・人生の選択に対して意志が一貫しない点・信念のなさ・心の弱さ・現実逃避・罪悪感からの責任逃れ」である。またエリスに対する「捨てて帰国するという裏切り」「妊娠に対する無責任な態度」「寂しさを埋め自分の存在を認めてくれる相手とする愛のあり方」、相沢への「責任転嫁」を否定していた。

イ 相沢に関すること

11名が述べていた。テキストにおいて相沢の内面はほとんど描かれず、描かれているのはその言動である。生徒は相沢の言動から人物像を「賢い」「優しい」「友人思い」「仕事や名誉を大切にする」など好意的な捉え方をしている。しかし相沢のエリスへの対応については批判的である。小説における相沢の存在の意味、相沢の役割に

ついては、次に挙げるような考え方が示されていた。

〈豊太郎を呪縛する存在／豊太郎の代弁者・分身／豊太郎が人生の岐路に立ったとき方向を示す存在／不可解な存在／小説の展開を促す役割〉

ウ エリスに関すること

6名が述べていた。エリスの感情の激しさや控えぬ感じから大胆になっていく変化を押さえたり、豊太郎への愛については「媚び」「あえて魅惑的に」「深い」「まっすぐ」「純粹」「一途」「重い」「執着」「深いために傷つく」「切ない」などの言葉を用いて述べている。豊太郎を利用しようとしていた、甘えすぎたという考えも示されていた。

(3) 分析

豊太郎を肯定する意見からは、豊太郎の内面に踏み込んだり、豊太郎の特性や立場を考え客観的に分析しようとする姿勢がうかがえた。自己矛盾や葛藤に人間らしさを感じていたものも多い。

否定派の意見からは、エリスや相沢などの他者との関係における豊太郎の言動をストレートに受け取っていることがうかがえた。また豊太郎の揺れ、流される心、弱さに触れている。

相沢については、人物像とともに小悦展開上の役割についてよくまとめていた。

エリスについては、豊太郎との出会いから関係が深まるまでの可憐で魅力的なエリス像よりも、後半の展開に見られる感情の動きや豊太郎への愛のあり方に着目してまとめていた。生徒から見ればエリスの愛は重すぎないようにも感じたようだ。

#### 4 平成26(2014)年度の場合(生徒数18名)

##### (1) まとめ学習の方法

本年度は、意見文の方向を授業者が「A 豊太郎の人物像・生き方について考える。相沢の人物像・生き方について考える」「B 『舞姫』その後の物語」として提示し、いずれかを選択させた。その後各自の文章に見合うテーマを設定して書いている。

##### (2) 意見文の内容

A について書いた者のテーマは a 「弱くふびんなる心」と豊太郎の苦しみ b 「心の弱さ」 c 「豊太郎から感じられる優柔さや弱さ」 d 「豊太郎の人物像について」 e 「豊太郎の信条」 f 「豊太郎の生き方」 g 「豊太郎の後悔」 h 「豊太郎の苦しみについて」 i 「明治維新と日本人」 j 「豊太郎の生き様」 k 「主人公の役割」 l 「豊太郎と森鷗外」 m 「豊太郎と学問」 n 「豊太郎と学問」 o 「舞姫」における相沢謙吉について p 「豊太郎と相沢」であり、14名が豊太郎を中心に、2名が相沢を中心にまとめた。

a ~ d は主に豊太郎の優柔不断さや弱さに触れ、本文のどの場面でそれらが表れていたかを言及しつつ、弱さ故の悩みや苦しみの深さを感じとっていた。(資料2 a)

e、f は周囲との関係における豊太郎の人物像をまとめた。

e は「太田豊太郎は意志が弱いだけでなく、周囲の環境に振り回されながらも、自分を導いてくれる人を大切にするとという信条を持った人なのではないだろうか」と僕は思う」 f は「彼は自分で物事を決められるまで自我を育てることができぬ間に、人生の大きな決断を強いられた不幸な男であったのだ。彼自身は悪い人間では決してな

かったが、不幸にも周囲に人生をもてあそばされ、破滅的な経験をしてしまったのだ。」とし、豊太郎の不幸は彼の弱さや中途半端な自我の目覚めと周囲とが絡まって起きたことだと考えている。(資料2 f)

g は、「豊太郎が自分でエリスに別れを告げていたとしたら、二人はわだかまりもなく別れることができただろうか。エリスは豊太郎と別れる気はなく一緒に日本に付いて行く気だったのだろうか。エリスはなかなか納得せず、もめたのではないかと思われる。では、豊太郎はエリスと一緒に日本に帰るということは可能だったのだろうか。豊太郎が天方伯のもとで仕事をするためには、女性関係での免官という先入観を払拭しなければならぬので、仕事を大切にしたい豊太郎にはエリスと一緒に戻ることは選べなかっただろう。豊太郎はこのような葛藤を抱えながら回想したのであると感じた」と述べ、エリスとの関係における豊太郎の葛藤に触れている。h は豊太郎の苦しみを順を追って丁寧と言及していた。

i、j は近代化が押し寄せた明治という時代を生きた人間としての豊太郎像を捉えている。i は「豊太郎の苦悩とは、新しい時代の幕開けとそれに触発されつつも未発達であった自我との間でうまれた、当時の人々の等身大の苦悩であったのではないだろうか」と豊太郎の苦悩と当時の人々の苦悩を重ね、(資料2 i) j はプライドも弱さも持ち、揺れながら生きた豊太郎を「豊太郎は明治という激動の時代を必死に生きていった」と評していた。

k、l は作者森鷗外と重ねて豊太郎像を捉えている。k は小説全体から豊太郎像をまとめつつ、「豊太郎は決して優れた人物としてで

はなく、人間味にあふれた人物として描かれているように見える」と感じたことから、豊太郎の役割は筆者のドイツ体験を伝えることではなかったかと考えている。また1は「豊太郎のモデルが森鷗外であるならば、これは森鷗外自身が負った罪のつぐないかもしれない」と懺悔録として作品を受け止めていた。

m、nは共に「豊太郎と学問」というテーマでまとめている。mは、豊太郎が興味を示した学問である政治学・法学、歴史学・文学、民間学を取りあげ、それらの学問には名声、自我の目覚め、エリスとの生活が象徴化されていると捉えていた。(資料2 m) nは豊太郎における学問の対象の変化を整理しつつ、「学問をすることで地位や名誉を確かなものにしてしようとしたのだろう」と結んでいる。

o、pは主に相沢謙吉の行動について述べている。oは相沢が登場した場面を整理し、「思うように生きてきた豊太郎と自分の意思を持ちそれを豊太郎に勧める相沢の性格との対比がよりいっそう豊太郎という人物像を引き立てているのではないだろうか。二人は上司部下という関係でもなく同年代である。そこに豊太郎の意思の弱さを強調するポイントがあるのではないかと思う」とまとめている。

pは豊太郎と対照的な相沢の人物像をまとめ、豊太郎の「一点の彼を憎むころ」について言及している。(資料2 p)

(3) 『舞姫』その後の物語の内容

Bについてはq【舞姫、墮ちる】r【ばやけた景色(日本へ帰つてからの豊太郎)】として2名が書いていた。

qはエリスが無事出産した場合と流産した場合を想定し、エリス、子供、豊太郎についてさまざまな未来を考えている。rは日本に

帰ってからの豊太郎の人生―仕事・結婚・離婚・エリスへの追慕―について物語化していた。(資料2 r)

(4) 分析

意見文の方向性を「人物像・生き方について考える」としたが、どの意見文からもテキストを叙述に即して丁寧読み取った上で、人物像を多面的に分析し、考えをまとめていることがうかがえた。したがって文章には説得力があった。また各自が設定したテーマのもとでスムーズに文章を展開していたものが多い。

5 平成27(2014)年度の場合(生徒数17名)

(1) まとめ学習の方法

発表学習で話し合われたことをもとに、授業者が次のようなテーマを整理し、提示した。

〈豊太郎の恋／豊太郎の生き方・豊太郎の人生／憂きが中にも楽しき月日／出世か恋か・名声か愛か／揺れる気持ち／豊太郎の人間性／豊太郎の性格／豊太郎の裏切り／豊太郎の弱さ／豊太郎の心情／豊太郎と母／エリスは魔性の女か／エリスの愛情／エリスの人生／相沢の優しさ／相沢の性格／物事の起こるタイミング／何が「良い道」で何が「悪い道」なのか(「良い」「悪い」とは何か)／「舞姫」の風景／その後の豊太郎とエリス／〉

本年度は全員の文章を読んだあと「意見文」「その後の物語」を読んで学んだことについて書かせた。

(2) 意見文の内容

14名の生徒の意見文のテーマは次の通りである。

A【豊太郎の長所】・B【豊太郎の良いところ】・C【豊太郎の人間性について】D【豊太郎の心の弱さ】・E【豊太郎を不幸にしたもの】F【豊太郎の選択は「良い」のか「悪い」のか】・G【豊太郎の恋】・H【出世か恋か】I【「舞姫」もしも私が豊太郎だったら】・J【エリスの母から見た豊太郎】K【エリスの目と彼女の悲しい人生】・L【エリスは魔性の女か】M【豊太郎・エリスの性格と人間関係】・N【豊太郎・エリス・相沢の人間性】O【「舞姫」の風景】

豊太郎について述べているものがA～Jの10名である。書かれていた内容を整理すると次の通りである。(○)「優しい」「親しい」「賢い」「勉強熱心」「勤勉」などを挙げ豊太郎の長所を述べている○豊太郎の名誉欲や責任転嫁を挙げ、否定的なとらえ方をしている○豊太郎の不幸をさまざまな視点から分析する○豊太郎の選択をエリスとのかかわり、時代や豊太郎の能力などを考えに入れつつ分析をする○豊太郎の恋の苦しさ、現代にも通じる出世か恋の間での葛藤を述べる○エリスの母の豊太郎への思いを想像しつつ、まとめる

K、L2名がエリスについて書いていた。(○)エリスの目の描写から読み取った人物像をまとめる○エリスの美しさを「純真と妖しさ」を併せ持つアンバランスな危ない均衡」と分析する)複数の登場人物像や関係について書いていたのがM、Nの2名である。(○)豊太郎とエリスの性格や関係を血液型にあてはめて考える○出会いの場面での豊太郎の心情とエリスの心情を考察し、愛とははかなく、くだらないものと述べる)Oは「舞姫」に描かれている風景を取りあげつつ、登場人物の状況や心情と関わらせていた。

(3) その後の物語の内容

3名がその後の物語を書いていた。P【その後】・Q【その後の豊太郎とエリス】・R【その後の豊太郎とエリス】である。

その後の豊太郎の心情や困窮する状況や結婚して幸せを得たエリスの姿を描いている。

(4) 分析

様々な視点を設定して文章を展開しており、意見文の内容は多様であった。発表学習時の活発な話し合いも反映されており、意見文を通して各生徒の個性が伝わってくるように感じられた。

6 平成28(2016)年度の場合(生徒数20名)

(1) 授業の方法

本年度も生徒の考えを整理し、テーマ例として提示した(資料3)上で、生徒にテーマを決めさせた。互いの意見文を読んで、単元を終えている。

(2) 意見文の内容

(主に豊太郎について書いているもの) 11名

- a【豊太郎の人間性とは】 b【豊太郎の人間性について】 c【豊太郎の人間性から物語の展開を読むと】 d【豊太郎が嫌い】 e【豊太郎の插らぐ決意】 f【豊太郎の決断の背景】 g【豊太郎の選択】 h【弱き心】 i【浅はかな豊太郎の行動】 j【豊太郎の人柄の変化】
  - k【豊太郎が「心の弱さ」を自覚したのはいつか】
- 本年度は、豊太郎についてはほとんどが否定的な見方をしていて、弱さや優柔不断な面、主体的でない決断のあり方に触れ、「情けな

さ」「言い訳がましさ」「卑怯さ」を感じている。弱さについては人間誰もが持っている心だとしているが、弱さはコントロールし克服すべきだと考え、豊太郎のあり方を反面教師として捉えている。エリスへの配慮のなさ、無責任な態度、裏切りに対しては強く批判している。kのように、心の弱さを豊太郎が自覚した時期や豊太郎が自分の思いを語っていない終末部分の描写に着目し分析したものである。また時代性を考えて文章を展開していたものもあつた。

〈豊太郎とエリスとの関係やエリスの心情について書いているもの〉2名

1 【豊太郎とエリスの愛情の変化】 m 【エリスの心情】

1は、豊太郎とエリスの愛はエリスの妊娠を契機に反比例していると捉え、悲しい結末をたどつたとしている。mは、エリスの愛がしだいに豊太郎にとって負担になつたのではないかと考え、エリスの不幸を述べていた。

〈相沢について書いているもの〉2名

n 【相沢とは何か】 o 【相沢の本心】

nは、相沢の最終場面での行動に対して「豊太郎の能力を使うために早く決断させようとする意図があつたのではないだろうか」、oは、「相沢は有能で仕事のできる豊太郎が、恋に溺れ、うつつを抜かしているのが許せなかつたのかもしれない。」という見解を示している。

〈作品のテーマについて書いているもの〉3名

p 【森鷗外が「舞姫」を通して伝えたかったこと】 q 【森鷗外が「舞姫」に著した教訓】 r 【「舞姫」を通して伝えたかったこと】

p、qは懺悔録として作品を捉え、そこから筆者のメッセージを教訓的に受け取っている。豊太郎の行動、生き方を反面教師として自分を見つめ直し改善していかなければならないとする。

rは豊太郎の生きた時代や状況を押さえながら、豊太郎の自我の目覚めや苦悩に触れ豊太郎を弁護していた。

〈独自の視点でまとめているもの〉2名

s 【舞姫の「子ども」について】 t 【「舞姫」はなぜ「舞姫」なのか】

sは「豊太郎の浅はかさ」を豊太郎とエリスの子の視点から述べている。tはタイトル「舞姫」について独自の見解を述べている。

タイトルには「華やかさ」や「躍動感」があるのに「エンディングに裏切られた」と述べ、そしてエリスだけが「舞姫」ではなく、「異国という大舞台の上で地位、名誉とエリスとの間で揺れる主人公の豊太郎こそが第二の…いや、真の『舞姫』だろう」という見解を示している。

(3) 分析

本年度は登場人物像を否定的に捉えたものが多く、人物像の把握がやや型にはまつたものになっていたことは否めない。豊太郎を反面教師とし、「舞姫」を教訓的に読み取った者も多かつた。「自分が豊太郎だつたらどう行動するか」を考えたととき、豊太郎のようであつてはならないと思つたのだろう。kやtのように独自性のあるテーマを設定し文章を展開していたものもあつた。

7 平成29(2017)年度の場合(生徒数24名)

(1) 授業の方法

意見文の視点や内容に対して自身に問いかけをしながらまとめるよう促した。テーマ例は授業者がプリントにして提示している。(資料4)本年度は25年度と同様、全員の意見文を読み終わった後、2名の文章に対する感想を手紙の形で書かせた。

(2) 意見文の内容

23名の生徒の意見文のテーマは次の通りである。

豊太郎を中心に 9名

A【豊太郎について】 B【豊太郎は変わったのか】 C【海外旅行のすずめ(豊太郎への影響より)】 D【二人の青年】 E【大田豊太郎は結局どういった人物だったのか】 F【ズレ】 G【なぜ日本への帰国を承諾したのか】 H【舞姫の葛藤】 I【「舞姫」を読んで】

エリスを中心に 6名

J【エリスの子どもと豊太郎】 K【エリスの狙いと豊太郎】 L【エリスの心情について】 M【エリス】 N【エリスの視点で追う舞姫】

O【日本人の潜在意識】

相沢謙吉を中心に 3名

P【相沢謙吉】 Q【相沢謙吉について】 R【「舞姫」を読んで】

筆者の意図 5名

S【舞姫】 T【森鷗外が伝えたかったこと】 U【筆者の意図に関し  
て+時代】 V【作品を通して伝えたかったこと】 W【鷗外の意図】

(3) その後の物語の内容 1名が擬古文で書いている。

X【A f t e r 舞姫】

交流活動において、豊太郎は変わったか、変わらなかったのか

議論されたので、それを受け豊太郎像を、自身の視点から見直し、文章をまとめているものが多かった。明治という時代を絡めて豊太郎像を捉えているものもある。エリスについてはさまざまな捉え方をし、相沢については豊太郎と対比しつつまとめている。「舞姫」というタイトルについて考えたものもあった。

(4) 分析

本年度は発表時の交流活動が活発であり、それを受けたまとめ学習である。したがってテーマも多様で、独自の視点で展開している文章は読み応えがあった。自身に問いかけながら文章をまとめていくことがうかがえ、説得力があった。

8 平成30(2018)年度の場合(生徒数24名)

(1) 授業の方法

前年度同様、意見文の視点や内容に対して自身に問いかけをしながらまとめるよう促した。テーマ例は授業者が提示している。

(2) 意見文・「舞姫」その後の物語の内容

20名の生徒の文章のテーマは次の通りである。

A【豊太郎の弱さ】 B【豊太郎の苦悩】 C【豊太郎の選択】 D【豊太郎の決断】 E【愛か仕事かの迷い】 F【豊太郎の心情の変化】 G【豊太郎とは】 H【豊太郎の性格】 I【豊太郎】 J【豊太郎の悩み】 K【豊太郎はどうすることが幸せだったのか】 L【豊太郎は結局どうすることが幸せだったのか】 M【豊太郎の幸せとは】 N【エリスへの愛情と裏切り】 O【エリスへの愛情と裏切り】 P【豊太郎の決

断と相沢の存在」Q【豊太郎が飼う猛獣は?】R【豊太郎の日本人らしさ】S【現代と近代の差】T【舞姫】その後の物語】

本年度は全員が豊太郎の人物像を中心にした文章を展開している。どの生徒も豊太郎の心情を叙述に即して丁寧な追いつつ、人物像を細やかに分析していた。豊太郎はどうすればよかったのか、自分ならどうするかと問いかけながらもとめている姿勢がうかがえた。Bの生徒は時に共感し、時に批判的な気持ちを抱きつつ読み進め、人物像を深めている。(資料5) これまでにはない切り口で書いていたのが、DとQである。Dは決断しない豊太郎の印象が強いなか、豊太郎の決断を「日記を船で綴ろうとすること」「洋行」「ドイツでの法律の勉強」「エリスを助けようとする事」「免官後のエリスとの暮らし」「ロシアへの同行」「帰国」の七点に見ていた。そして、「自分の身としての決断」「他人に流された結果の決断」と整理し、後者の決断が物語の展開につながっているとする。Qは豊太郎の二面性を考察する中で豊太郎をハリネズミと結びつけている。

### (3) 分析

本年度の交流活動は、進行はスムーズで、促されれば誰もが自分の考えを述べていたが、自発的な発表は少なかった。おとなしい交流活動だったと言える。意見文は、登場人物を自分に引きつけながら丁寧に読解しつつ、自分なりによく考えて書いていた。

## ◇ おわりに

八年にわたり多くの生徒の意見文を読んできて、生徒の人間観の

深さや、独自の視点に驚き感心することが多かった。発表・交流学習終了後、生徒は改めて「舞姫」という作品に向きあい、考えたことを文章に綴っている。文章に共通する要素はあっても、誰一人として同じ内容はない。一人ひとりの文章がみな違っていることは、当たり前かもしれないが、そのことにも驚いている。

八年の間では社会の変化に応じて生徒の状況も変化している。その変化の中で、意見文を見通したとき、変わっていることも変わっていないことも見られた。発表学習、まとめ学習においてその年々の特色も感じた。発表や交流活動における内容は意見文にも反映されている。

「舞姫」は発表された当時からさまざまに論議されている。論議の焦点は今の生徒においてもあまり変わらないかもしれない。ただ現代を生きる生徒としての受け止め方を行っている。「舞姫」という作品は時代を超えて多様な読み方を促す作品であったと思う。

(広島大学教育学部研究科研究生)





